

さまざまな経験やそのときどきの想いを
糧に築きあげて昨日より今日
今日より明日の人生を充実させている
KYONOSUKEさんの生き方を紹介します。

One's Life

(より豊かに生きるためのヒントをお伝えします)

「新しいことをやり続けていく」 バスケットボールで自己発信！

KYONOSUKEさん



【Profile】弘前市出身。プロバスケットボール選手。ストリートボールリーグでプレイ後、青森ワッツに加入。現在は3人制プロバスケットボールチーム「八戸DIME」に所属し、3シーズン目を迎える。

自己発信を続ける理由

昨年はBリーグ青森ワッツでプレイしたKYONOSUKEさん。青森県をバスケットボールで盛り上げたい、活気づけたい、話題づくりをしたいという目的で青森に戻ってきました。プロの5人制バスケットボールの世界に初挑戦し、「勝つためにやるべきこと、チームのためにできることを見つけられる人が本当のプロ選手だ」と感じたそうです。バスケットボール三昧の生活は「楽しいし嫌いじゃないですね」。

KYONOSUKEさんというキャラクターが確立されたのは、大学を休学後バスケットボールから離れていた時に会ったストリートボールでした。バスケットボールにワンスパイスが加わって、新たな自分を見出せた分岐点だったといえます。寺嶋恭之介よりも、KYONOSUKEさんという名前が全国・世界に広まり、SNSやメディアで実践したことをどんどん発信するきっかけとなりました。「他の人と同じことをしていてもつまらない、常に新しいものを企て、

新しいことをやり続ける存在でいたい」と、県内の公園でバスケットボールをしている動画などもアップ。これは県外や世界にいる多くのフォロワーに青森県のことを知ってほしいからです。

YouTube「KYONOSUKEチャンネル」の他、各種SNSでの発信、アパレルブランド「91BALL」ではTシャツ等のデザイン、プロデュースもしています。「いろいろな活動をして自分をもっとさらけ出したい」という思いは、コロナ禍で制限され、もどかしさも感じています。

バスケットで挫折しても、バスケットが転機に

小学4年からバスケットボールを始め、津軽中学校卒業後は、福井県の北陸高校へ進学。

「入学して半年くらいはホームシックで、めちゃくちゃ泣いていました」。朝食当番、掃除や洗濯、練習の準備、雑用と強豪校の厳しい環境の中でバスケットに集中できず、どうすればサボれるかを探していたそうです。ある先輩がきっかけで毎日早朝からシューティング練習をするようになり、1年生の冬、ユニフォームを絶対勝ち取る！という願いが叶いました。とても濃い3年間を過ごしたとふりかえります。

国士舘大学でもバスケットボールを続けますが、都会に慣れ、誘惑や自由が多く、「今の自分と比べるとバスケットに全然集中できていなかったですね」。そして4年生の時、「もう限界だ、これ以上うまくならない」と父親に伝え、退部後、大学を休学。昼は児童館、夜はバーの仕事に掛け持ちして働き、ボールに一切触らない日々を過ごしました。

しばらくしてストリートボールに出会い、リーグでチームの主力選手として4年間プレイした後も大きな挫折を経験。2019年、バス

ケットボールを辞めて、青森に戻ってきました。その年に3人制プロバスケットボールチーム「八戸DIME」から誘いがあり、自分の中に悔しい気持ちがあったことに気づき、プロ契約を締結。今シーズンもプレイしています。「常に試合の準備をして、会場に足を運んでくれるファン一人ひとりのことも考えて準備しています。青森県のために戦っていることも含めて見てほしいですね」。

現役中に次世代の育成をしたい

今は、子どもたちが指導者を選べる時代。これまでのストリートボールや3人制プロバスケットボール、Bリーグに飛び込んだ経験や、KYONOSUKEさんスタイルを確立するためにやってきたことを、説得力のある形で子どもたちに教えられるようになりたい。考え方や人間的な部分、そしてバスケットボールのすべてを教えられたらと話します。「KYONOSUKEさんと一緒にバスケットを盛り上げようとか、何かやるうというエネルギーが集まっていきたい」。バスケットボールをやっていないけれども、こうしてつながっていくことを願っています。

常にいろいろなところにアンテナを張って、自己発信をすることで情報交換をしています。

「青森県のために自分の力を使うというのは変わらない。青森県のためにという軸はブレていません」。今しかできないという思いで、毎日バスケットボールのことを仕事にしているため、悩むくらいプライベートがないそうです。

現役選手でありながら、次世代の育成、そしてバスケットボールを通して青森県が話題にあふれることを願い、青森県で生きていくと決めたKYONOSUKEさん。今後の活躍を見守っていきましょう。

(取材…吉町 友美)